

委員長から応援メッセージ



澁谷 稔
中央執行委員長

ともに活動を進めていこう

育児で大変ななか、休業中も副委員長としてよく頑張ってくれました。これからは仕事の責任が加わり大変だと思いますが、森谷さんのような女性が一人でも多く活躍できる環境づくりに向け、一緒に活動を進めていきましょう。

仕事・家庭・組合活動・趣味 すべてを充実させるために UWLBを取り入れよう

「女性は時間にメリハリをつけるのが上手だと思います。仕事もしたい、組合活動もしたい、趣味も楽しみたい、結婚もしたい、人間どれか一つというわけにはいかない」と森谷さんは話す。「それを実現するために女性が組合活動にもっと参加、参画してほしい」と力を込める。「私の場合、チャンスを得ただけで自分のライフスタイルのなかでバランスをとりながら、組合活動を継続していきたい」と語る。

森谷さんは現在、午前九時四十分～午後四時二十五分までの勤務。保育園まで自転車で豊子ちゃんを送り迎えをし、中学三年の優人君が塾へ行く前に食事の支度を済ませるのが日課。子育てしながら働く仲間の気持ちが分かり、組



Life

「女性は時間にメリハリをつけるのが上手だと思います。仕事もしたい、組合活動もしたい、趣味も楽しみたい、結婚もしたい、人間どれか一つというわけにはいかない」と森谷さんは話す。「それを実現するために女性が組合活動にもっと参加、参画してほしい」と力を込める。「私の場合、チャンスを得ただけで自分のライフスタイルのなかでバランスをとりながら、組合活動を継続していきたい」と語る。

森谷さんは現在、午前九時四十分～午後四時二十五分までの勤務。保育園まで自転車で豊子ちゃんを送り迎えをし、中学三年の優人君が塾へ行く前に食事の支度を済ませるのが日課。子育てしながら働く仲間の気持ちが分かり、組

プロフィール

もりや ひなこさん。1976(昭和51)年10月、兵庫県生まれ。現在、都内に夫、長男(15歳)、長女(3歳)の4人暮らし。1999(平成11)年、高島屋入社。外商勤務などを経て、現在、業務部担当課長。労働組合では、昨年から高島屋労組副中央執行委員長に就任。全高島屋労連(=全高連)副会長を兼務。「ユニオン・ワーク・ライフ・バランス」を実践中。



高島屋労組が進める「ユニオン・ワーク・ライフ・バランス」を実践する女性を紹介。森谷雛子さんは、ことし4月に育児休業から復帰し、現在、育児短時間勤務制度を利用しながら社内システムの管理部門で担当課長を務めている。長年組合の役員を務め、育児休業中も執行委員会や労使交渉に出席、男女共同参画を推進している。

「ユニオン・ワーク・ライフ・バランス」を みずから実践し、男女共同参画を進める

高島屋労働組合
副中央執行委員長

森谷 雛子 さん

Union

育児休業中も活動を 継続する第一号に



育児休業中も賃金交渉に出席

娘の豊子ちゃんが三歳になるまで育児休業を取得した森谷雛子さん。二〇〇九年に高島屋労組の中央執行委員に就任し、全高島屋労連(=全高連)の副会長としても活躍。妊娠が分かったとき、末吉武嘉労働会長(当時)に組合役員を降りるつもりで相談したところ、「出産後、ほとんどの女性は復職するが、組合活動は辞めてしまおう。活動を続ける第一号になってほしい」と説得されたそう。森谷さんは悩んだ末「辞めることはいいけれどもできる。続けられる限りやってみよう」と決意した。とはいえ、家族の理解も必要。「夫



組合の大会にも出席し役割をこなした

が「声がかかるうちが花だよ」と背中を押してくれました」と微笑む。育児休業中も賃金交渉に出席。また執行委員会などに出席するため月三、四回、組合事務所に通った。さらに、UAゼンセンの大会などにも出席。その際は、UAゼンセンが設けた託児サービスを利用した。「プロが対応してくれるので、安心して預けられました」と語る。



昨年、浜松で開催したUAゼンセン第3回中央委員会で託児サービスを利用した様子

Work

育児、仕事、組合活動、 忙しくても続けて良かった

森谷さんは高島屋に入社後、外商部の営業などを経験し、現在、育児短時間勤務制度を利用しながら業務部に勤務する。組合活動は三十歳のときから携わるようになった。夫・学さんと結婚したのは三十四歳のとき。森谷さんは妻になると同時に、優人君(当時十歳)の母親になった。

全高連の副会長として、旧サービス・流通連合(JSD)の執行委員も務めていた森谷さん。子育てをしながらフルタイムで働き、組合役員の活動をこなしていた当時のことを「大変でした。忙し過ぎて記憶がないくらいです」と振り返る。「家族をはじめ、職場や組合の仲間の理解を得るために、日ごろのコミュニケーションが大切なのはもちろんですが、時間を捻出するために優先順位をつけながらバランスをとることが大事ですね」と自身の経験を話しながら、どんなに忙しくても組合活動を続けてきた良かったと語る。「育児休業中も活動していたおかげで、会社の動きも分かり、復職しやすかったです」。

友好組合として日ごろから交流のある、いよつ高島屋労組で、森谷さんのように出産後も執行委員として組合活動を続けたいという女性が現れたそう。女性の活躍推進に役立てたのはうれしかったと微笑む。「育児、仕事、組合活動を同時にこなすのは勇気がいりますが、道を切り拓く人が必要なのだ」と実感しました。



東京・茅場町のオフィスに通う森谷さん。写真下は、日本橋タカシマヤ外観

支部委員長から応援メッセージ



田中 辰也
新宿支部執行委員長

後輩達の良き目標に

里見さんは職場、労働組合、家庭と日々全力投球しています。活動の領域が広がり、大変なこともあります。持ち前のガッツで、果敢にチャレンジしています。今後も後輩達の目標となってくれることを期待しています。

ライフステージを大切に 「いまは子育てに携わりたい」



「体も心も不安定で、一番大変な時期といわれる産後一カ月に妻をフォローしたいと思いました」。育児休業の取得に当たっては、夫婦でよく話し合って決めました。取得を決定した背景には、妻・さとみさんの職場（小売業）で男性の育児休業取得の事例があったこと、またさとみさんの両親が祖母の介護に携わっている

ことなどがあつた。「私が育児休業を取ったことで、妻は二人目の出産を考えるとさっかけになったようです」と語る。仕事と家庭のあり方は、各人のライフステージによって異なる。「いまは仕事を優先しよう、いまは子育てに携わる時期といった具合に、各家庭に合ったバランスをとることが大切ですね」と微笑む。「私達夫婦の場合、育児休業や短時間勤務の利用を選択するしかありませんでした。組合活動はもともと就業時間外に行っていますので、子育て中でも資料をつくったり、会議に出席することはできます」と話す。「子育ては限られた期間しかできません。いまは子育てに携わりたい」と里見さんは力を込めた。

Life

プロフィール

さとみ たつやさん。1985（昭和60）年9月、千葉県生まれ。現在、都内に妻、長女（2歳）、長男（生後3カ月）の4人暮らし。大学時代はアメリカンフットボールに熱中し、就職してからはマラソン大会（100キロ）に出場するほどのスポーツマン。座右の銘は「志（こころざし）」。「自分の意志を持って生きてほしい」と、「志」を入れた名前を長女に命名した。



高島屋労組新宿支部で初めて育児休業を取得した男性を紹介。里見龍哉さんは、高島屋新宿店のギフトサロンで副セールスマネジャーを務める傍ら、新宿支部の書記次長を務めている。ことし第二子誕生の際は1カ月間、育児短時間勤務制度を利用。「ユニオン・ワーク・ライフ・バランス」をみずから実践している。

高島屋労働組合
新宿支部書記次長

里見龍哉さん

新宿支部の男性育児休業取得第1号 組合活動、仕事、子育ての充実を实践

Union

育児休業の経験者として 子育て支援充実を訴える

里見さんは二〇〇九年五月に新宿支部執行委員に就任し、組合活動に携わるようになった。二〇一三年五月から書記次長を務める。現在、仕事、家庭、組合活動をバランス良く充実させている。秘けつを尋ねると、「組合活動



田中委員長と今後の活動を協議する

育児に関する社内制度を利用する場合、制度を理解してもらえようサポートすること、また男性が育児参画することに対して職場の仲間の理解を一層深めていくことが必要だと

は自己啓発につながり、これが仕事にも生かされるようになります。家庭での時間にも良い影響をもたらします」と笑顔で答えてくれた。

里見さんは育児休業を取得した経験から、「男性が



ことし2月、新宿店の労使で周辺の清掃活動を実施した

思いました」と話す。里見さんのような制度を利用した男性が増えていくことが取得促進につながるとも語る。「これからは男女がともに働き、ともに子供を育てることが一般的になってくると思います。育児休業を取得した立場で、育児に参画する男性を後押ししていきたい」と語る。

Work

仲間に支えられ 育児短時間勤務も取得

里見さんは二〇〇八年四月に高島屋に入社。二〇一三年一月、長女の志帆ちゃんが生まれて一カ月後に、新宿店の男性で初めて育児休業を二週間取得した。当時、ブライダルサロンの担当者であった。

育児休業の取得を決意したものの、「自分の価値観が職場の皆さんに受け入れられてもらえるだろうか」と不安だったと振り返る。さっそく、職場の上司や当時の新宿支部の執行委員長に思いを打ち明けたところ、快く「やってみたら」と背中を押してくれたという。職場の仲間達も理解を示してくれたそうだ。

「ホッとしました。」と同時に皆さんに感謝しています。労使で推進しているワーク・ライフ・バランスが風土として根づいている影響も大きかったですね」と話す。

ことし三月、長男の一哉ちゃんが生まれたときは、育児短時間勤務制度（一日実労働時間五十分の短縮）を一カ月間取得した。育児休業を取得する選択肢もあったが、職場で管理監督者の立場にあつたことから、志帆ちゃんの保育園のお迎えに対応するため、短時間勤務を選択したという。

短時間勤務のときは、職場の仲間達が里見さんの勤務時間に合わせて会議を開催するなど協力してくれたそうだ。育児休業や短時間勤務をつうじて、意思の疎通の大切さや効率良い仕事の進め方を意識するようになったと話す。「働き方が異なる仲間の気持ちに寄り添うことが大切だと改めて思いました」。



上は、十階のギフトサロンで進物品担当のプロとして、豊富な知識で真心こめてお客さまに対応する里見さん。下は、複合商業施設「タカシマヤタイムズスクエア」の外観。高島屋新宿店のほかに多くの専門店が入店

